

## 現代日本語の謝罪言葉に関する研究

佐藤 啓生

### 1. はじめに

私たちが言葉による謝罪を行なう場合には、「ごめんなさい」「すみません」といった、謝罪の意味を表わす定型表現を使用することが多い。これらの定型表現は、用例を細かく見ていくと、感謝や通行時の挨拶など、明確な謝罪以外の意味を表わす場合もあるが、基本的には謝罪の文脈で使用されることが多い。よって、謝罪の意味を表わすことのある定型表現を、本稿では「謝罪言葉」と呼ぶこととする。

「謝罪言葉」に関する先行研究では、定型表現ごとの言葉としての性質の違いや、表現ごとの使い分けが起る要因となっている文脈上の要素について、様々な観点からのアプローチが行なわれている。しかし、多岐に渡る要素同士の相互関係に触れたものや、個々の表現ごとにどのような要素の傾向が見られるか、つまりは具体的に何によって使い分けられるのか、といったことをまとめた研究は少ない。

そこで本稿は、ドラマの脚本から用例を得て、先行研究で取り上げられた、または今回の研究で有効と判断した、謝罪言葉の使い分けに関わる要素を、相互関係も含めて整理したい。またそれにより、「ごめんなさい」「すみません」といった、いくつかの代表的な謝罪言葉について、それぞれどのように使い分けられているのかを提示する。

### 2. 調査対象

まず、調査に使用する資料、調査対象とする謝罪言葉、「謝罪」という用法の定義について述べる。

#### 2.1. 調査に使用する資料について

今回の研究においては、調査する用例をドラマの脚本に求めることとした。そのとき、対象となるドラマのジャンルや作家などに偏りが出ないように<sup>1)</sup>、日本脚本家連盟の『テレビドラマ代表作選集』を使用し、過去11年（1999～2009）分のテレビドラマ・ラジオドラマの脚本（68作品91本）から、謝罪言葉の用例を採取して調査対象とした<sup>2)</sup>。

用例をドラマの脚本に求めた理由としては、主に以下の二つがある。

一つは、様々な立場・状況における用例を簡単に採取することができるためである。それぞれ脚本家の主観を通してではあるが、話し手は小学生から会社の社長に至るまで、また状況は個人的な謝罪から記者会見での謝罪まで、ドラマの脚本からは様々な用例を採取することができる。

もう一つの理由は、脚本のセリフというものが、俳優が実際に発声することを想定している分、小説などの会話文と比べて、より自然な発話に近いと考えたためである。様々な用例を得るだけならば小説などでも問題はないのだが、脚本のセリフの方が、生身の人間が声に出して不自然でないような配慮がなされていると考えた。

ただし、水本（2010）が指摘している通り、ドラマの中のセリフは、そのまま自然な発話とイコールというわけではない。例えばドラマの脚本中では、最近ではあまり聞かれなくなった女性文末詞「わ」「かしら」などが、女性のセリフとして、自然会話よりも頻繁に使用されているという（水本2010 p.92）。脚本家の多くは「実際に話されているかどうか」より、「登場人物のキャラクターが伝わりやすい話し方、状況設定にあわせた話し方」を選択しているという調査結果も提出されており（同p.101）、謝罪言葉の使用傾向もその影響を受けているという可能性は、常に念頭に置いておかなければならない。

そのため、今回の調査対象はあくまで「ドラマのセリフに見られる現代の謝罪言葉」であり、現実で使用される謝罪言葉ではないが、傾向としてはそれに近いものと考えておく。

## 2.2. 調査対象とする謝罪言葉について

次に、本稿で取り扱う謝罪言葉については、「ごめん」「ごめんなさい」「すみません」「申し訳ありません」の大別4種に限定する<sup>3)</sup>。

謝罪言葉には他にも、「悪い」「許してくれ」などがあるが、先に挙げた4種の言葉は、他の謝罪言葉に比べて使用例が多く、小野他（2001）や山本（2004）など多くの先行研究でも用法の差異が論じられており、代表的な謝罪言葉であると考えられる。

よって今回の研究では、「ごめん」「ごめんなさい」「すみません」「申し訳ありません」の4種を調査対象として取り上げ、主に以下の三つの観点から、それぞれの用法の差異を明らかにする。

- 1：「ごめんなさい」と、その単純な省略形にも見える「ごめん」との差異について
- 2：丁寧な形の「すみません」、同じく丁寧な形だが命令形である「ごめんなさい」との差異について
- 3：敬体の「ます」を含む言葉同士という観点から、「すみません」と「申し訳ありません」の差異について

## 2.3. 「謝罪」という用法の定義について

1章で触れたように、「謝罪言葉」は謝罪以外にも、感謝や挨拶などに用いられることがある。本研究は謝罪言葉同士の差異を明らかにすることを目的としているが、謝罪の用法に限定した場合の差異や、謝罪以外の用法の使用傾向における差異などを見るためには、謝罪とそれ以外の用法とを区別する必要がある。

そこで、謝罪言葉の各用法について以下のように、謝罪とそれ以外の用法を区分した。

以下、内省による用例（謝罪言葉は「すみません」で統一）を挙げた上で、各用法について簡単に解説する。なお、一般的な用語と区別するため、謝罪言葉の各用法は《 》で示す。

《謝罪》——「こんな忙しい時期に休暇を取って、すみません」

（※「取らせてもらって」だと利益に注目→《感謝》に）

言及対象が過去のできごとであり、かつ、そのできごとで相手が受けた被害に注目した場

面、いわゆる謝罪の場面で使用されるものを言う。

《感謝》——（お茶を出してもらって）「あ、すみません」

言及対象が過去のできごとであり、かつ、そのできごとで自分が受けた利益に注目した場面、いわゆる感謝の場面で使用されるものをいう。

《注意喚起》——（人に話しかけながら）「すみません、駅にはどう行ったらいいですか？」

会話を始めるときや仕切りなおすときに、相手に呼びかけ、自分の存在を認識させるために発せられるものをいう。

《あいさつ》——「では今日はこれで、すみません。」（退出する）

道を通るときや他家への訪問時、部屋への入退室時などの、謝罪言葉の直後に動作が続くという特定の場面で使用されるものをいう。謝罪言葉自体は前置きであり、続く動作が本題となっている。

《依頼の前置き》——「すみません（が）、取ってもらえますか？」

依頼行為（人に何かを頼むという行為）の前置きとして用いられるものをいう。謝罪言葉自体は前置きであり、続く依頼行為が本題となっている。

《却下の前置き》——「すみません（が）、先生にはお会いいただけません。」

相手の意に沿わないことを表明する、否定的な言及の前置きとして用いられるものをいう。謝罪言葉自体は前置きであり、続く否定的な言及が本題となっている。

《辞退》——「僕たち付き合わない？」「すみません。」（※「ごめんなさい」の方が自然）

相手の申し出を拒否する・断るような場面で使用されるものをいう。謝罪言葉自体が本題となっており、前置きとは異なる。

以上のように、謝罪言葉の用法を7種に区分した上で、《謝罪》に限定した場合の謝罪言葉の差異や、《謝罪》以外の用法の使用傾向における謝罪言葉の差異などを見ていく。

### 3. 使い分けの要素

次に、謝罪言葉同士の差異を見る際に、使い分けの要素として注目した、またはその判断のために使用した調査項目について述べる。

なお、本稿では資料から採取した用例すべてについて、以下①～⑤の項目を調査し、データベースの形にまとめて分析を行なった。

#### ①接続

謝罪言葉の後に接続するものを記載する。例として、終助詞「な」「ね」などによる【話し手の性別】の偏りや、「ごめんごめん」などの連続発話による謝罪の【性質】の変化などが注目される<sup>4)</sup>。

## ②用法

2章で述べたとおり、謝罪言葉ごとに、《謝罪》とそれ以外の用法の使用傾向を確認するのに使用する。

## ③対象

謝罪言葉の言及対象となっている事柄について記す。続く【責任の所在・方向性】および【事柄の性質】の判断に使用する。

## ④責任の所在・方向性

【対象】を客観的に評価し、責任の所在や方向性を区分する。

基本的に謝罪とは、話し手自身が聞き手自身にしたことに対して行なわれるものだが、中には例外もある。そういった例外的なケースについて、「他人のしたことを代わりに謝るもの」を『代理』、「被害者自身ではなくその関係者に謝るもの」を『帰属』、「追及されていない状況で自発的に責任を感じて謝るもの」を『自責』として区別した。

## ⑤事柄の性質

【対象】を客観的に評価し、事柄の性質を7種に区分した。基準は以下のとおりである。

- ・ 監督：監督対象が何をしたかによらず、自身が監督責任を遂行できなかったということが謝罪すべき事柄となっているもの。
- ・ 傷害：他人の肉体を傷つける事態に対して謝罪言葉を使用しているもの。実際に傷つけたり、健康を損なわせたりした場合のみとし、未遂や軽度の接触（ぶつかる、足を踏むなど）は含めない。
- ・ 傷心：他人の心を傷つける事態に対して謝罪言葉を使用しているもの。後述する「不興」と区別するため、友情にヒビが入るなど、心を傷つけたことにより人間関係が変化するレベルのみを「傷心」とする。
- ・ 生死：他人の生命を損なう事態に対して謝罪言葉を使用しているもの。実際に死んでしまった場合のみを含め、そうでない場合は、生死の境をさまよう大怪我などであっても「傷害」に含める。
- ・ 損害：他人の財産を損なう事態に対して謝罪言葉を使用しているものである。金銭だけではなく、所有物などへの損害も含める。
- ・ 不興：他人の気分を損なう事態に対して謝罪言葉を使用しているもの。他のすべての【性質】にも伴われる事態ではあるが、具体的な被害を伴わず、気分を悪くするだけという事態もあるため、独立した区分として設けた。
- ・ 負担：他人に何かを負担させる事態に対して謝罪言葉を使用しているもの。時間（急な訪問、遅刻）や手間（何かをさせる、やり直させる）、心理的負担（心配、我慢）などが該当する。話し手だけで済むことなく、聞き手にも何かをさせているという点で、「不興」とは区別する。

## ⑥手段

謝罪言葉がどのようにして表明・伝達されるかについて、直接対話、電話、手紙（文面）、独白（独語）、電子メール、留守番電話などに区分する。

## ⑦状況

【対象】の補足として、発話前後の詳細な状況などを記す。また、前後の発言に謝罪言葉が登場し、近接している場合などは特筆する。

## ⑧⑨話し手・聞き手（キャラクター名、性別、年齢）

話し手の属性による使用表現の違いや、性差の影響などを調べる。また、【年齢差】については後に項目を設けた。

## ⑩人数

聞き手の人数を記す。多くは1人の相手に対する謝罪だが、中には複数人、あるいは不特定多数に対して使用されている用例などもあるため、2人以上の場合のみ記入する。

## ⑪関係

話し手と聞き手の関係を記す。「母親」「祖父」などの続柄や、「友人」「知り合い」など一言でまとめられるものもあるが、中には「見舞い客と看護士」など、双方の立場を併記する形でしかまとめられないものもある。また、「婚約者であり、自分の通う大学院の教授でもある」などの複雑な関係については、その場の【状況】に相応しい方を【関係】に記し、他方は【親疎】の項目で補足する。

## ⑫内外他

【関係】をウチ・ソト・ヨソの3段階で判定する<sup>5)</sup>。先行研究（三宅1993,1994 山本2004）の区分では明確な基準が提示されていないため、本稿では、関係の目安となるものをいくつか設定した。

ヨソは先行研究において、「自己やウチとは関係がないがなにかのきっかけで関係をもちえる人々」（三宅1994 p.31）とされているが、本稿では、「初対面の相手」「相手の名前を知らない・知ったばかり」を判定基準とする。

ソトは先行研究では、「ごく親しくはないが自己やウチと関連のある人々」（同前）であるが、本稿では、「名前や顔を以前から知っている」「初対面だが、その後の付き合いが予想される（例：婚約者の親族など）」とした。

ウチは先行研究では、「自己のまわりの家族やごく親しい人々」（同前）とされており、本稿でもこれに従う。ただしこの基準では、ソトとの区分が難しい関係がいくつか見られる。例えば、子供を捨てた親や離婚した夫婦など、家族の枠組みを一度離れたものや、家族の周縁に位置する親戚筋、そして友人や親友などである。しかし実際の用例では、親子や夫婦などは、家族の枠組みから一度離れた場合でも、隔絶の年月に関わらず親しげな口調で、「ウチ」と判定できるものが多い。逆に親戚筋は、普段からの交流があまりなく、他人行儀な口調で、「ソト」と判定されるものが多かった。

また、友人や親友については、普段は敬体を使用せずに会話するなど「ウチ」に近い傾向を見せるが、謝罪しなければならないようなシビアな場面では心理的な距離が生まれ、家族などよりも遠い位置づけとなることが考えられる。そのため今回は、一般的な友人のほとんどを「ソト」とし、家族同然に付き合っている親友のみを「ウチ」と判定した。

## ⑬親疎

【関係】および【内外他】の補足として、どの程度の仲かなどを記す。

## ⑭年齢差

【話し手】と【聞き手】の年齢を比較し、【話し手】から見た【聞き手】の年齢を、上・等・下の3段階で判定した。成人については1, 2歳程度の差は「等」と判定したが、就学年齢の児童については、学年の違いから厳密に判定した。

ただし、登場人物の年齢が明記されていない作品も多いため、年齢差が確定しないものもある。また、【人数】が複数のときは、年齢差に上下幅が出る場合がある。

## ⑮社会的な立場の差

登場人物に設定されている社会的な役職や立場を客観的に評価し、【話し手】から見た【聞き手】の立場を、上・等・下の3段階で判定した。このとき、登場人物間の力関係や、謝罪すべき状況などは無視し、平常時の社会的な立場の上下のみで判断した<sup>6)</sup>。これは、謝罪すべき状況自体が、話し手が聞き手に対して弱い立場に置かれているということであり、それが両者の力関係にどう影響を及ぼすのか、一概には判定できないためである。

従ってこの項目については、力関係や謝罪状況といった個々の事情を省くことで、社会的な立場の上下を判定しやすくし、またそれによって、社会的な立場の差を無視する特性を持つ登場人物の存在を浮き彫りにする。

また、【関係】が双方の立場を併記する形の場合、上下差が確定できないものもある。また、【人数】が複数のときは、社会的な立場の差に上下幅が出る場合もある。

## 4. 調査結果

今回の調査によって得られた謝罪言葉の総用例数は625件だった。謝罪言葉ごとの件数としては、「ごめん」が147件、「ごめんなさい」が113件、「すみません」が298件、「申し訳ありません」が67件となっていた。

以降の節で、今回注目した要素ごとの件数や使用率について考察していく。

## 4. 1. 謝罪言葉の用法について

謝罪言葉の用法について、各謝罪言葉の用法ごとの件数を表1にまとめた。

表1：用法ごとの件数

用法	謝罪	感謝	注意喚起	あいさつ	依頼前置	却下前置	辞退	判断不能	合計
ごめん	117(79.6%)	3	0	9	4	6	6	2	147
ごめんなさい	96(85.0%)	0	0	3	2	6	4	2	113
すみません	169(56.7%)	38(12.8%)	41(13.8%)	15	13	14	5	3	298
申し訳	50(74.6%)	1	0	1	2	8(11.9%)	3	2	67
合計	432(69.1%)	42	41	28	21	34	18	9	625

※それぞれのパーセンテージは、各行の右端の「合計」を100%としたときの値である。以下の表も同じ。

今回調査した中で用例数が最も多いのは、「すみません」の298件だが、《謝罪》での使用率は56.7%と最も低くなっている。一方、《謝罪》での使用率が最も高いのは「ごめんなさい」で85.0%である。

また、《注意喚起》は「すみません」にのみ表われ、他の謝罪言葉では見られなかった。ただし、「すみません」以外での《注意喚起》として、「ちょっとごめんなさい」などの例も考えられるため、今回の調査結果だけで《注意喚起》は「すみません」に限ると断定することはできない。

さらに、《感謝》についても大半が「すみません」に偏っており、特に「ごめんなさい」を《感謝》として使用する例はまったく認められなかった。これについても、「ごめん」「申し訳ありません」の《感謝》がごく少数であることを鑑みると、たまたま今回の用例に《感謝》の「ごめんなさい」が現われなかっただけという可能性も考えられる。

その他、「申し訳ありません」は他に比べて、《却下の前置き》の比率が高くなっている。ただし件数自体は他の謝罪言葉より多いというわけではないため、《却下の前置き》としての用例に「申し訳ありません」が多く登場するというわけではない。

#### 4.2. 事柄の性質と責任について

謝罪すべき事柄の性質および責任ごとの件数については、用例全体の件数を表2に、《謝罪》に限った場合の件数を表3にまとめた。

それぞれの件数を見ると、「ごめん」「ごめんなさい」「申し訳ありません」は不興と負担が

表2：性質および責任ごとの件数（《謝罪》／全体）

性質	監督	傷害	傷心	生死	損害	不興	負担	不明	小計	合計
ごめん	1/1	0	15/16	2/2	4/4	54/61	34/55	1/1	111/140	117/147
(代理)	0	0	0	0	0	1/1	0/1	0	1/2	
(帰属)	0	1/1	0	0	1/1	0	0	0	2/2	
(自責)	0	1/1	1/1	0	0	0	1/1	0	3/3	
ごめんなさい	1/1	3/3	4/8	4/4	6/6	38/41	30/39	0/1	86/103	96/113
(代理)	0	1/1	0	0	0	1/1	2/2	0	4/4	
(帰属)	0	2/2	1/1	1/1	2/2	0	0	0	6/6	
(自責)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
すみません	9/9	0	0	0	4/4	62/67	79/201	0	154/281	169/298
(代理)	0	0	0	1/1	0	2/2	5/6	0	8/9	
(帰属)	0	2/2	0	1/1	2/2	0	2/2	0	7/7	
(自責)	0	0	0	0	0	0/1	0	0	0/1	
申し訳	5/5	1/1	0	1/1	4/4	12/16	9/19	0	32/46	44/61
(代理)	0	0	0	0	2/2	4/4	3/6	0	9/12	
(帰属)	0	0	0	1/1	0	0	2/2	0	3/3	
(自責)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
合計	16/16	11/11	21/26	11/11	25/25	174/194	167/334	1/2	426/619	426/619

※各欄の数値は、／の左側が《謝罪》の件数、右側が全体の件数となっている。以下の表も同じ。

※「申し訳ありません」に、(代理かつ帰属)の傷害が4/4件、同じく傷心が2/2件あったが、表2中には含めていない。

ほぼ同数で最多なのに対し、「すみません」は負担の方だけが高くなっている。

また、責任についての件数で極端に高いものはなかったが、「申し訳ありません」は代理の使用率が20%弱を占めている。ただし、母数が少ないため、代理の件数自体はほかの謝罪言葉と大きく差があるわけではない。

一方で、《謝罪》の用法に限定した場合、「すみません」の不興と負担の差は減少し、ほぼ同数となっている。逆に「ごめん」については不興の比率が41.5%から46.2%に上昇しており、負担との差が拡大している。

そのほか、「申し訳ありません」についても不興と負担の比率が逆転しており、代理の比率は20%前後で変わっていないが、そもそもの母数や件数が少ないため、深く考察の対象とはせず、ここで言及するに留めておく。

#### 4.3. 話し手の属性について

続いて、年齢や性別といった、話し手の属性ごとの件数を以下に挙げて考察する（表3）。

表3：話し手の性別・年齢ごとの件数（《謝罪》／全体）

性別\年齢	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	成人	不明	合計
ごめん：男	11/12	11/12	6/8	2/2	5/7	1/1	1/1	0	16/19	0/1	53/63
ごめん：女	7/12	12/12	18/21	3/10	7/7	1/1	1/1	2/2	12/17	0	63/83
小計	18/24	24/24	24/29	5/12	12/14	2/2	2/2	2/2	28/36	0/1	116/146
ごめんなさい：男	10/10	1/1	0	0	1/2	0	0	0	5/5	0	17/18
ごめんなさい：女	12/18	20/27	7/8	2/2	8/9	3/3	2/2	1/1	19/20	4/4	78/94
小計	22/28	21/28	7/8	2/2	9/11	3/3	2/2	1/1	24/25	4/4	95/112
すみません：男	13/15	10/24	15/23	8/15	6/13	3/4	0	0	33/45	1/4	89/143
すみません：女	16/20	20/47	16/26	9/10	4/6	0	0/1	0	14/39	0/2	79/151
小計	29/35	30/71	31/49	17/25	10/19	3/4	0/1	0	47/84	1/6	168/294
申し訳：男	1/1	4/5	4/4	5/5	9/12	2/2	0	0	4/8	1/1	30/38
申し訳：女	3/3	6/6	3/5	0	3/5	0	1/2	0	3/6	0	19/27
小計	4/4	10/11	7/9	5/5	12/17	2/2	1/2	0	7/14	1/1	49/65
男性小計	35/38	26/42	25/35	15/22	21/34	6/7	1/1	0	58/77	2/6	189/262
女性小計	38/53	59/92	44/60	14/22	22/27	4/4	4/6	3/3	47/82	4/6	241/355
合計	73/91	85/134	69/95	29/44	43/61	10/11	5/7	3/3	105/159	6/12	428/617

※性別も年齢も不明なものが「ごめん」「ごめんなさい」に1/1件ずつ、性別不明の成人が「すみません」に1/4件、「申し訳ありません」に1/2件あったが、表3中には含めていない。

##### 4.3.1. 話し手の年齢について

まずは話し手の年齢<sup>7)</sup>について述べる前に、今回の調査対象であるドラマの脚本に登場した人物の年齢層について、以下にその人数を示す<sup>8)</sup>。

10歳未満：10人 10代：71人 20代：73人 30代：66人 40代：43人 50代：38人  
60代：16人 70代：10人 80代：2人 90代：1人 成人：132人 合計：462人

上記の人数を踏まえた上で、話し手の年齢について考察していく。

まず、全体の年齢ごとの合計件数について見てみると、20代が最も多く、それに10代、30代が続いている。これは、ドラマの登場人物に10～30代が多く、462人中210人と半数近くを占めていることとも関係しているため、「10～30代の人物は謝罪言葉の使用率が高い」と一概に言い切ることはできない。

ただし、40代と50代の件数を比較してみると、若干ではあるが登場人物の少ない50代のほうが、40代よりも件数が多くなっている。これには、50代という年齢の登場人物が、組織や団体を代表する立場として設定されており、そのような人物が謝罪するという場面がドラマではよく見られることとも関係があると考えられる。

一方、件数としては少ない60～80代だが、今回用例として使用した全作品の登場人物の中で、60代は16人、70代は10人、80代は2人、その他年齢の確定しない高齢者は10人強存在した。件数を合わせて見てみると、大体2人につき1件程度の割合となっている。

また、60～80代では、謝罪言葉の全体の使用件数と《謝罪》としての件数がほとんど変わらない。つまり、今回調査した用例の中で、60～80代が使用した謝罪言葉は、ほぼすべてが《謝罪》の用法で使われていたということである。

次に、謝罪言葉と年齢の関係について注目すると、それぞれの謝罪言葉で件数が多い年代は、使用件数全体では「ごめん」は10～30代、「ごめんなさい」は10、20代、「すみません」は20代、「申し訳ありません」は50代となっている。

このとき、「申し訳ありません」以外の3種については、ドラマの登場人物の多い年代がそのまま、謝罪言葉の件数の多い年代となっている。このように、登場人物の年代分布と同じ傾向を示しているということは、年代ごとに平均的に使用された結果のあらわれとも考えられる。

また、《謝罪》の方では、「すみません」は20代の比率が下がって10代や30代にも広く使われている。これは、《謝罪》以外の用法が20代で多く使われていることを示している。また件数は少ないながら、「申し訳ありません」でも50代の比率が下がり、20代の比率が上がっていることから、同じことが言える。

#### 4.3.2. 話し手の性別について

続いて、全体の性別に着目すると、女性ごとの小計が合計の50%を超えて、男性ごとの小計よりも多くなっている。

また、各謝罪言葉では、「ごめん」「すみません」は女性の方が、「申し訳ありません」は男性の方の使用が若干多いが、ほぼ同数におさまっている。しかし、「ごめんなさい」の話し手については、極端に女性が多くなっている。これは、《謝罪》の場合でも同じ傾向が見られるが、「すみません」の話し手で男性の方が若干多くなっている点だけが、全体とは異なっている。

そのほか、各謝罪言葉の性別ごとの合計件数について、全体と《謝罪》を比較してみると、「ごめんなさい：男」の件数がほとんど変わっていないことがわかる。つまり、今回調査した用例の中で男性が使用した「ごめんなさい」は、ほぼすべてが《謝罪》の用法で使われていたということである。

なお、「～な」「～ね」といった一部の終助詞がついた場合に、話し手の性別が偏るという例も見られた。しかし、基幹となっている言葉は同じであるため、表では特に区別していない。終助詞がついた場合の話し手の性別については、後で詳しく触れることにする。

#### 4.3.3. 話し手の年齢と性別について

さらに、年齢と性別を組み合わせると、全体では男女ともに10～30代の使用が主となっている。しかし、20、30代の性別ごとの小計を合わせてみた場合、女性が152件に対して男性が77件と、女性側が約2倍の件数を示している。

また《謝罪》でも女性103件に対して男性51件と、ほぼ同じ傾向が見られる。これは、若い世代では男性よりも女性の方が、謝罪言葉の使用例が多いということを示している。

上記の点について、謝罪言葉ごとに細かく見ていくと、全体では「ごめん」30、40代や「ごめんなさい」全般、「すみません」20代などにおいて、女性の使用率が男性の使用率を大幅に上回っている。逆に、男性の使用率の方が高い部分としては、「すみません」「申し訳ありません」の40、50代が挙げられる。

また、全体と《謝罪》を見比べたとき、件数の差が大きい、つまり《謝罪》以外の用法が多いのは、「すみません」全般のほかに、40代の女性が使用する「ごめん」や、10代の女性が使用する「ごめんなさい」などがあつた。

#### 4.4. 話し手と聞き手の性差について

話し手の性別については前節で触れたが、この節では話し手と聞き手の性差について取り上げる。以下、性差ごとの件数について表4にまとめた。

表4：話し手と聞き手の性差ごとの件数（《謝罪》／全体）

話し手	聞き手	ごめん	ごめんなさい	すみません	申し訳	小計	合計
男	男	12/15	5/5	40/61	16/20	73/101	201/286
女	男	37/48	35/43	48/81	8/13	128/185	
男	女	40/46	9/9	42/64	2/5	93/124	178/236
女	女	25/32	36/39	18/35	6/6	85/112	
合計		114/141	85/96	148/241	32/44	379/522	

※除外対象となつたのは、「ごめん」3/6件、「ごめんなさい」11/17件、「すみません」21/57件、「申し訳ありません」18/23件。

なお、聞き手が複数人の場合、男女混交のグループという例もあり、性差がはっきりしなくなることがある。そのため、聞き手が複数人のものはすべて件数から除外した。

また、話し手もしくは聞き手の性別が、作中の描写からは不明であるものや、聞き手がまだ話し手の目の前に登場していないなど、話し手が聞き手との性差を意識することができないと考えられるものについても、件数からは除外した。

それぞれの表について件数を見ていくと、全体・《謝罪》ともに、「女性→男性」が最も多い。ほか3つはどれも大体同じ件数だが、比較的多いのは「男性→女性」であり、最も少ないのは「男性→男性」だった。

結果として、聞き手の性別ごとの合計件数を見ると、全体・《謝罪》ともに、聞き手は男性のほうが多くなっている。また、前節でも触れたことだが、話し手は女性の方が多い。

続いて、謝罪言葉の種類ごとに見ていく。

まず、「ごめん」については、全体の場合も《謝罪》の場合も、男女とも同性に対する使用の方が少ないという結果になった。特に「男性→男性」の使用件数は、「ごめん」の中では最も少ない。しかし、前節で示したとおり、「ごめん」は男性の使用件数が特に少ないわけでは

ないため、件数が少ない理由は性差の方にあると考えられる。

次に、「ごめんなさい」については、全体・《謝罪》どちらの場合でも、話し手が男性であるものの件数が少なくなっている。これは前節で示した結果のとおりである。また、聞き手による件数の変化はあまり見られず、性差による影響はあまりないと考えられる。

そして「すみません」は、全体の場合、使用件数が最も多いのは「女性→男性」、最も少ないのは「女性→女性」と、どちらも話し手が女性のものとなった。前節で示した通り、「すみません」は女性の使用件数が特に多いわけでも少ないわけでもない。「ごめん」同様に、件数が多い・少ない理由は、性差によるものと考えられる。

なお、《謝罪》の場合では、全体の場合に比べて、性差による件数の差が少なくなっている。これは、「女性→男性」の「すみません」が、他の性差の場合より、《謝罪》以外の使用率が高いということを示している。

最後の「申し訳ありません」は、全体でも《謝罪》でも、聞き手が男性であるものの件数が多かった。また、「女性→女性」で使用された「申し訳ありません」6件は、すべて《謝罪》として使用されていた。

#### 4.5. 話し手と聞き手の人間関係について

続いては、話し手と聞き手の人間関係について取り上げる。ここで人間関係としているのは、「ウチ・ソト・ヨソ」で区分される親疎関係と、「上・等・下」で区分される上下関係である。

以下、謝罪言葉ごとの親疎関係・人間関係の組み合わせについて、《謝罪》と全体の件数を表5a～dに示す。

表5a: ごめん (《謝罪》 / 全体)

立場	年齢	ウチ	ソト	ヨソ	合計
上	上	1/1	0/1	0	1/2
	等	0	0	0/1	0/1
	下	0	0/1	0	0/1
	不明	0	0	0	0
	小計	1/1	0/2	0/1	1/4
等	上	10/15	1/1	1/1	12/17
	等	23/25	24/34	1/1	48/60
	下	29/31	17/20	1/1	47/52
	不明	1/2	1/2	0/1	2/5
	小計	63/73	43/57	3/4	109/134
下	上	1/1	0	0	1/1
	等	0	0	0	0
	下	2/2	0	0	2/2
	不明	0	1	0	0/1
	小計	3/3	0/1	0	3/4
合計		67/77	43/60	3/5	113/142

表5b: ごめんなさい (《謝罪》 / 全体)

立場	年齢	ウチ	ソト	ヨソ	合計
上	上	3/3	6/9	1/1	10/13
	等	0	0	0/1	0/1
	下	0	2/2	0	2/2
	不明	2/2	2/2	0/1	4/5
	小計	5/5	10/13	1/3	16/21
等	上	15/17	18/21	5/6	38/44
	等	8/8	4/5	0	12/13
	下	4/4	1/2	10/10	15/16
	不明	2/2	1/3	2/3	5/8
	小計	29/31	24/31	17/19	70/81
下	上	0	0	0	0
	等	0	0	0	0
	下	1/1	0	1/1	2/2
	不明	0	0	0	0
	小計	1/1	0	1/1	2/2
合計		35/37	34/44	19/23	88/104

※立場や年齢の項目は、「話し手から見た場合の聞き手の立場・年齢」を示す。以下の表も同じ。

※除外対象となったのは「ごめん」4/5件、「ごめんなさい」8/9件、「すみません」17/34件、「申し訳〜」18/22件。

表5c：すみません（《謝罪》／全体）

立場	年齢	ウチ	ソト	ヨソ	合計
上	上	0	34/42	3/6	37/48
	等	0	1/1	1/2	2/3
	下	0	1/1	2/2	3/3
	不明	0	4/6	2/2	6/8
	小計	0	40/50	8/12	48/62
等	上	6/8	38/64	9/23	53/95
	等	4/4	9/13	6/9	19/26
	下	2/2	4/9	3/7	9/18
	不明	0	10/14	10/43	20/57
	小計	12/14	61/100	28/82	101/196
下	上	0	1/1	0	1/1
	等	0	1/1	0	1/1
	下	0	0/1	0/1	0/2
	不明	0	1/2	0	1/2
	小計	0	3/5	0/1	3/6
合計	12/14	104/155	36/95	152/264	

表5d：申し訳ありません（《謝罪》／全体）

立場	年齢	ウチ	ソト	ヨソ	合計
上	上	0	10/11	0	10/11
	等	0	4/6	1/2	5/8
	下	0	0	0	0
	不明	0	1/4	1/2	2/6
	小計	0	15/16	2/4	17/25
等	上	1/1	10/11	1/1	12/13
	等	0	0/1	1/1	1/2
	下	0	0	1/3	1/3
	不明	0	1/1	0/1	1/2
	小計	1/1	11/13	3/6	15/20
下	上	0	0	0	0
	等	0	0	0	0
	下	0	0	0	0
	不明	0	0	0	0
	小計	0	0	0	0
合計	1/1	26/34	5/10	32/45	

なお、聞き手が複数人のものについては、前節と同様の理由により、件数から除外した。

また、話し手と聞き手の人間関係が不明であるものや、話し手が聞き手との人間関係を意識することができないと考えられるものについても、件数から除外した。

#### 4.5.1. 親疎関係について

まず親疎関係について、全体の件数から見ていくと、ウチに対するものが129件、ソトが293件、ヨソが133件となっている。また、《謝罪》の件数はウチが115件、ソトが207件、ヨソが65件だった。

両者の件数を比較すると、ウチに対する謝罪言葉は、大半が《謝罪》の用法ということがわかる。ソトに対するものは7割程度が《謝罪》の用法であり、逆にヨソに対するものは、半分以上が《謝罪》以外の用法となっている。

謝罪言葉ごとの件数を見た場合、「ごめん」と「ごめんなさい」はウチとソトの相手に対して多く使用されている。ただし、「ごめんなさい」はヨソの件数も23件（22.1%）と比較的多く、親疎関係の件数は平均的になっている。

一方、「すみません」はソトとヨソが多く、「申し訳ありません」はほとんどソトの相手に対して使用されている。

また、《謝罪》の件数でも全体的な傾向は変わらないが、「すみません」はソトが10%増、ヨソが10%減になっており、ソトの比率が高まっている。

#### 4.5.2. 上下関係について

次に、社会的な立場の差と年齢差の組み合わせから、話し手と聞き手の上下関係を見ていく。なお以降は、社会的な立場の差については（話し手から見て）「格上・同格・格下」、年齢差については（話し手から見て）「年上・同年・年下」とそれぞれ表記する。

はじめに、全体における上下関係ごとの件数の差は以下の通りである。

社会的立場の差——格上：112件 同格：431件 格下：17件  
 年齢差——年上：245件 同年：115件 年下：101件 不明：104件

このように、謝罪相手との社会的立場の差は同格である場合がほとんどで、格下の例はほとんどなく、年齢差については相手が年上であることが一番多いが、同年や年下の場合も多く見られた。

また、あらかじめ述べておくと、すべての謝罪言葉について、全体の場合と《謝罪》の場合で、使用傾向に大きな差は見られなかった。

まず「ごめん」については、全体の場合と同格かつ、同年か年下の相手に対して使用されている。逆に、格上や格下の相手に対してはほとんど使用されていない。

一方、「ごめんなさい」は同格でも、年上の相手に対して多く使用されている。また件数自体はそう多くないが、格上かつ年上に使用される例も見られる。なお、格下に対して使用される例はほとんど見られない。

続いて「すみません」は、同格以上で年上の相手に対する使用件数が、合計件数の半分を占めている。逆に、年下や格下に対する使用件数は少ない。

そして「申し訳ありません」は、「すみません」と同様に、同格以上で年上の相手に対する使用が主になっている。特に、格下に対する使用はまったく見られなかった。

#### 4.5.3. 親疎関係と上下関係について

最後に、親疎関係と上下関係を組み合わせて考察する。

なお、あらかじめ述べておくと、全体の場合と《謝罪》の場合とで、使用傾向に大きな差は見られなかった。唯一変化があったのは前述の通り、「すみません」のヨソに対する使用比率が大きく下がったことだけである。

まず、「ごめん」は主に、同格でウチ・ソトの相手に対して使用されている。このとき、ウチの場合は年上に対しても使うが、ソトの場合は年上には使われていない。

次に、「ごめんなさい」は主に同格に対し、親疎関係を問わずに使用されている。ウチ・ソトの場合は年上に使うのが主で、ヨソの場合は年下にも使う。また、ソトかつ年上なら、格上の相手であっても使われる。

続いて「すみません」は、ソト・ヨソの相手に対して使用されている。ソトの場合は年上かつ同格以上の相手に対して使うが、ヨソの場合は同格の相手が主となっている。これは、ヨソの相手は基本的に出会ったばかりであり、社会的な立場の上下が即座につくとは限らないことによると考えられる。

最後に、「申し訳ありません」は主にソトかつ年上の相手に対して使用される。社会的な立場は同格以上の場合のみであり、格下の相手に対する用例はまったく見られなかった。

#### 4.6. 終助詞

謝罪言葉ごとの話し手の性別の傾向については、4.3節で触れたとおりだが、それぞれの謝罪言葉に終助詞が接続する場合、話し手の性別には次のような傾向が見られた。

まず、「ごめん」に終助詞がついた場合、「ごめんな」はすべて男性で7件だった。

次に、「ごめんね」は全部で35件、うち男性が8件、女性が27件と、女性に偏った。

以下に、「ごめんな」「ごめんね」についてそれぞれ用例を挙げる。

航空便のダンボールに資料や原稿用紙を詰めこんでいる。

楯夫、デスクの上の妻の写真と目が合った。

楯夫「(微笑みかけ) ……ごめんな。お前は連れてけないんだ」

(『テレビドラマ代表作選集1999年版』 p.253 『結婚前夜』 第四章 家族をつくる愛)

美知子「もういいのよ、美枝」

美枝「でも……」

美知子「ごめんね、無理言って。お母さん、何とかするから」

(『テレビドラマ代表作選集2004年版』 p.40 『さとうきび畑の唄』)

このとき、辞書(『新明解国語辞典』第五版)によれば、終助詞「な」には男性が使用する意味も存在しており、話し手が男性に偏る理由をつけることができる。しかし、終助詞「ね」には女性が使用する意味が特に存在するわけではないにも関わらず、話し手が女性に偏っている。

また、「ごめんよ」は7件あり、男性5件、女性1件、性別不明1件となっていた。ただし、この男性5件は、すべて時代劇中の同一人物だったため、口癖など個人特有の事情による可能性が考えられ、終助詞「よ」が男性に偏るとはいえない。

続いて「ごめんなさい」に終助詞がついた場合、「ごめんなさいね」は10件で、男性1件、女性9件だった。また、「ごめんなさいよ」は時代劇中の女性に1件だけ見られた。ただし、「ごめんなさい」自体の話し手が女性に大きく偏っており、終助詞「ね」「よ」が使い手の性別に影響を与えているとは一概に言えない。

さらに、「すみません」に終助詞がつく場合、「すみませんね」は5件で、男性1件、女性3件、性別不明1件だった。「すみませんのう」は男性1件だが、時代は戦時中で、広島弁を話すとされている登場人物だった。

最後に、「申し訳ありません」に終助詞がつくものは、「申し訳ありませんのう」の男性1件のみで、話し手は「すみませんのう」と一緒だった。

上記の結果から、助動詞がついたときの話し手の性別が、元の謝罪言葉と異なる傾向を示すのは、「ごめんな」(男に偏る)、「ごめんね」(女に偏る)の2種類があった。

## 5. 謝罪言葉の使い分け

### 5.1. 使い分けに関わる要素

今回の調査に用いた使い分けの要素の中で、他の要素と組み合わせることによって有用な結果を得ることができたものには、以下のようなものがあった<sup>9)</sup>。

- ・話し手の属性：「話し手の性別」+「話し手の年齢」(+「終助詞」)
- ・性差：「話し手の性別」+「聞き手の性別」
- ・上下関係：「年齢差」+「社会的立場の差」
- ・人間関係：「内外他」+「年齢差」+「社会的立場の差」

このうち「性差」は、更に「人間関係」と組み合わせることで、「性差」が「人間関係」の構成に与える影響を見ることもできると考えたが、今回の用例数では不十分だったためか、件数の分布があまりに散逸してしまい、参考にはできなかった。

また、今回導入した要素の中には、件数が少なかったり、偏ったりしていたために、言葉の使い分けに際して有効に機能するかどうか、不明なものもあった。

しかし、「責任の所在・方向性」などは、代理や帰属などに該当する場面が、そもそもほとんど登場しないということがわかったため、その意味で有用性はあまり高くないことが確かめられた。

今後、新たな要素を追加する場合や、要素の組み合わせを見るにあたっては、出現頻度も考慮に入れて導入する必要がある。

## 5.2. 謝罪言葉同士の差異

今回取り上げた4つの謝罪言葉については、2章2節で述べたとおり、「ごめんとごめんなさいの違い」「ごめんなさいとすみませんの違い」「すみませんと申し訳ありませんの違い」という3つの観点から、以下のようにまとめられる。

### 5.2.1. 「ごめん」と「ごめんなさい」の違い

「ごめん」と「ごめんなさい」は、語形の類似から見て、同一の語源を持つ言葉同士であると考えられる。

しかし、現代においてこの両者は、「話し手の年齢」「話し手の性別」「聞き手との性差」「聞き手との人間関係」という四つの要素によって使い分けられている。

まず、話し手の年齢として、「ごめん」は10代から30代まで広く使えるが、「ごめんなさい」は30代の使用数が少ない。

次に、話し手の性別について、「ごめん」が男女とも使用でき、女性の方が若干多い程度の表現なのに対し、「ごめんなさい」は使用者の大半が女性という、いわば女性語的な性格を強く帯びている表現である。

続いて、聞き手との性差について、「ごめん」は同性に対して使用しにくい傾向があるが、「ごめんなさい」は特に性差の影響を受けない。

最後に、聞き手との年齢差については、「ごめん」がウチならば年齢を問わず、ソトならば年下や同等の相手に用いられるのに対し、「ごめんなさい」はウチ・ソトの年上や、ヨソの年下の相手に使用されている。

つまり、「ごめんなさい」の側から見た場合、「ごめん」は、【30代でも使いやすい】【男性にとって使いやすい】【同性に対して使いにくい】【ヨソには使えない代わりに、ウチやソトならば同等から年下までカバーしている】という謝罪言葉として、使い分けられている。

### 5.2.2. 「ごめんなさい」と「すみません」の違い

「ごめんなさい」と「すみません」は、どちらもある程度丁寧な表現と考えられるが、「ごめんなさい」の方は命令形であるという点で異なっている。

さて、現代においてこの両者は、「用法」「話し手の性別」「聞き手との性差」「聞き手との親疎関係」「未知の相手かどうか」という五つの要素によって使い分けられている。

まず用法上の違いとして、「ごめんなさい」は《感謝》や《注意喚起》に使えないか、使用例が非常に少ないのに対し、「すみません」はそのどちらにもよく使われている。

次に、話し手の性別として、「ごめんなさい」は女性の使用する言葉という傾向が強いが、「すみません」は男女どちらでも使用できる表現である。

続いて、聞き手との性差について、「ごめんなさい」は特に性差の影響を受けないが、「すみません」は女性から女性に使いにくい傾向がある。

さらに、聞き手との親疎関係については、「ごめんなさい」がウチ・ソトの年上の相手に使用されるのに対し、「すみません」はソト・ヨソの年上に使用されている。

最後に、「未知の相手かどうか」については、相手のことを視認できていない場合や、相手特定しない場合などには、「すみません」の方がよく使用されている。

つまり、「すみません」と比べると、「ごめんなさい」は、【《感謝》や《注意喚起》に使えない】【男性にとって使いにくい】【女性に対しても使いやすい】【ヨソには使えない代わりに、ウチに使える】【未知の相手に使いにくい】という謝罪言葉として、使い分けられている。

なお、「ごめんなさい」と「すみません」の用例数には大きな差があるが、これは「ごめんなさい」の側に、「〇〇に使えない・にくい」という制限が多く存在するためだと考えられる。よって、用例数の差そのものは、使い分けの原因ではなく結果であると判断する。

### 5.2.3. 「すみません」と「申し訳ありません」の違い

「すみません」と「申し訳ありません」は、どちらも敬体の「ます」を含んでいるが、表現としての長さなどから、「申し訳ありません」の方が丁寧な表現というイメージを与えられているように感じられる。

だが、現代において両者は、「用法」「話し手の年齢」「話し手の性別」「聞き手との性差」「聞き手との親疎関係」「未知の相手」という6つの要素によって使い分けられている。

まず用法上の違いとして、「すみません」は《注意喚起》にも使えるのに対し、「申し訳ありません」は《注意喚起》にほとんど使われていない。

次に、話し手の年齢として、「すみません」は10代から30代まで広く使えるが、「申し訳ありません」は主に50代が使用する。

続いて、話し手の性別として、「すみません」は男女どちらでも使用できるのに対して、「申し訳ありません」は男性の方が使用している。

さらに、聞き手との性差について、「すみません」は女性から女性に使いにくい傾向があり、「申し訳ありません」は男性から男性に使いやすい傾向がある。

そして、聞き手との親疎関係について、「すみません」はソト・ヨソの年上に対して使用されるが、「申し訳ありません」はソトの年上のみ使用されている。

最後に、「未知の相手」については、相手のことを視認できていない場合や、相手特定しない場合などには、「すみません」の方がよく使用されている。

つまり、「申し訳ありません」との比較において、「すみません」は、【《注意喚起》にも使える】【10代から30代にとって使いやすい】【女性にとって使いやすい】【女性から女性に使いにくい】【ヨソに対しても使える】【未知の相手に使いやすい】という謝罪言葉として、使い分けられている。

なお、「ごめんなさい」と「すみません」以上に、「すみません」と「申し訳ありません」の用例数には大きな差があるが、同様の理由によって、用例数の差そのものは、使い分けの原因ではなく結果であると判断する。

## 6. 終わりに

本稿では、「ごめん」「ごめんなさい」「すみません」「申し訳ありません」の4つの謝罪言葉について、それぞれどのようにして使い分けられるのかを明らかにするため、調査と考察を行ってきた。

その際、使い分けの原因となる要素については、先行研究でそれぞれ挙げられていたものを取りまとめ、総合的に扱ったほか、自身で付け加えた要素も含めて、用例の分析を行なった。

結果として、「ごめん」「ごめんなさい」「すみません」「申し訳ありません」の4つの謝罪言葉について、それぞれがどのような要素に基づいて使用され、どのように使い分けられるかを示すことができた。

ただし、今回用例として使用したのは、ドラマの脚本の台詞であり、そこにはドラマ特有の使用傾向が含まれていることも考えられる。つまり、現実の会話とは異なる結果が示されている可能性もある。

今後の展望としては、本稿で示した要素や基準をもとに、現実の発話から集めた用例を分析し、ドラマと現実の発話の間にある矛盾や相違を見つけ出すほか、現実の発話における使い分けの要素や基準を明らかにしていくことなどが考えられる。

### 資料および参考文献

- 日本脚本家連盟（1999）～（2009）『テレビドラマ代表作選集1999年版』～『テレビドラマ代表作選集2009年版』株式会社 NHKオフィス企画
- 金田一京助・著 山田忠雄ほか・編（1997）『新明解国語辞典』第五版 三省堂
- 小野由美子、許清平、森清隆、森勇樹（2001）「日本語母語話者にみる感謝と謝罪表現の使用——「ありがとう」、「すみません」再考——」『鳴門教育大学実技教育研究』Vol.11 pp.75-83 鳴門教育大学
- 水本光美（2010）「テレビドラマ——“ドラマ語”としての『女ことば』」中村桃子『ジェンダーで学ぶ言語学』pp.89-106 世界思想社
- 三宅和子（1993）『「詫び」以外で使われる詫び表現——その多用化の実態とウチ・ソト・ヨソの関係——』『日本語教育』82号 pp.134-146 日本語教育学会
- 三宅和子（1994）「日本人の言語行動パターン——ウチ・ソト・ヨソ意識——」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』9 pp.29-39 筑波大学
- 山本もと子（2004）「社会的相互行為としての謝罪表現——言語表現選択の背景には何があるのか——」『信州大学留学生センター紀要Vol.5』pp.19-31 信州大学

- 1) ドラマの原作者・脚本家によって、使用する謝罪言葉の傾向に偏りがある場合などが考えられたためである。なお、今回用例を採取した68作品のうち、原作者・脚本家が共通の人物であるものは、人数としては11人、作品数としては23作あったが、特別な偏りが見られた場合のみ、別途考察することとした。
- 2) 調査対象を過去11年分とした点については、この研究では時代的な用法の変遷について深く掘り下げるつもりはなく、また調査上の問題から、対象とする年代の範囲を区切る必要があったためである。なお、今回の調査においては、原作の発表年や作中の舞台が10年以上のもので、現代と異なる言葉遣いが含まれる可能性がある作品の中の用例についても、大きな差異が見られない限り、現代を舞台にしたものなどと一緒にして扱った。方言色の強い作品なども同様で、明らかな違いが確認された場合のみ、別途考察することとした。
- 3) 「すいません」「すみません」「申し訳ございません」なども、それぞれ「すみません」「申し訳ありません」に含めた。これは、敬体の「ます」を含むか否かという観点からは意味上に大きな差が見られず、同種の語と扱っても問題ないと判断したためである。逆に、形が崩れすぎた「すみません」や、「ます」を含まな

い「申し訳ない(です)」などは除いた。

また、謝罪言葉の後に助動詞「～でした」、終助詞「～な」「～ね」など、接続詞「～が」「～けど」などが続くものについても、接続元の謝罪言葉に含めるものとした。

更に、「ごめん下さい」「御免こうむる」や、動詞「済む」の否定形としての「済みません」など、挨拶的な定型表現ではないものについては、謝罪言葉には含めない。

そのほか、謝罪言葉の例として提示されているもの(「ごめんなさいで済むか」など)や、事前に行なわれた謝罪を引用しているだけのもの(「ごめんなさいって言ったでしょ」など)については、用例としては採取したが、検討の際には謝罪言葉としては扱わなかった。これらの言葉が直接「謝罪」という言語行為に使用されているわけではないと考えたからである。

- 4) なお、「ごめんごめん」のように、同一の謝罪言葉が連続して使用される場合、それは1件の発話として数える。ただし、謝罪言葉同士の間に、他の文が挟まれているものなどは、1件ずつ別のものとして扱った。また、間に他者の沈黙(三点リーダーのみの発言など)が入っている場合や、別種の謝罪言葉が連続して使用される場合についても、1件ずつ別に数えたが、連続発話に類するものとして、別途考察した。
- 5) このとき、ウチとソトの2つだけでなく、ヨソも必要となるのは、「その場限りの関係」という最も疎遠な関係を表わすのにヨソが必要であり、またソトの関係とヨソの関係とでは言語選択に差があることが先行研究で示されているためである(三宅1993,1994 山本2004)。
- 6) なお、「父親」「母親」などの家庭内の上位者については、公的な場面での上位者と区別するため、社会的立場の差は「等」と判定した。親子が真に対等な間柄とは考えづらいが、両親などは【関係】の項目で露出しやすいため、別途考察が必要となる場合はそちらで対応する。  
その他、特殊な立場の差としては、「先輩⇄後輩」「教師⇄生徒」などがある。これらの関係は前述の通り、登場人物間の実際の力関係は無視して、社会的な立場としては明確な上下関係を持つものとして判定した。同様に、「店員→客」の立場の差もすべて「上」とした。ただし、「客→店員」の立場の差は「下」ではなく、「等」と判定することとした。
- 7) なお、用例の中には、年齢が明記されていない登場人物も多く存在したため、次のような措置を取った。  
まず、本人の年齢は不明でも、長子の年齢がわかっているものについては、仮に「長子の年齢+28」を本人の年齢とした。これは、今回調査対象とした1999～2009年の間で、1999年(平成11年)の平均初産年齢が27.9歳というデータに基づく(厚生労働省の人口動態統計より)。  
次に、本人の年齢は不明だが、同級生や同世代の相手の年齢が分かっているものについては、それを本人の年齢として統計に含めた。  
さらに、周囲の人物も含めて明確な年齢の記述がないものは、作中の描写から、未成年と成人とに区別した。成人については欄を設け、未成年は10代の欄に統合した。  
最後に、描写が少ないなどの理由で年齢が判別できないものについては不明とした。
- 8) 名前が与えられている登場人物のみを数えた。なお、作中で時代設定の大きな変遷があった場合、年齢の変化した登場人物は、それぞれの時代ごとに一人としてカウントしている。
- 9) このほか、同じ謝罪言葉が連続して使用された場合、「ごめんごめん」のみ、元の「ごめん」とは異なった性質を示すことが確認されたが、それは「ごめんごめん」の特徴であり、「ごめん」と他の謝罪言葉の違いとは言えないと考え、本稿では省略した。